おかげさま

編集・発行
おかげさまの会
足利市本城3－2055
樹覺寺あけし会館

終　活（しゅうかつ）

お日さまの光が、きらきらと優(やさ)しく明るい日差しになり、梅が咲き、春の香りに誘われて境内の木々や草花が、春ですよと声かけてくれているように咲き始めました。やっぱり春は嬉(うれ)しいです。小さなスノードロップ、クロッカス、もう少しで山茱萸(さんしゅゆ)が咲き出します。境内が光輝いてきますよ。

卒業式が修まり、新年度スタート、新たな歩み出しです。世の定年年齢を過ぎると、我が身に直接関わる新年度は実感としては薄らいでいるようにも思われますが、身近な家族や、縁ある人とのつながりによって、心浮き立ち、揺らぎして、我が身を正し、背筋(せすじ)を伸ばし、身の引締(ひきし)まる思いもありますね。やっぱり有り難いことです。

数年前から、言葉を短縮して使うことが当たり前のようになってきました。若い人から始まり、初めて耳にした時は「えっ、それ何語？」言っている言葉が理解できませんでした。そんな言葉がだんだん当たり前の言葉として、年齢に関係なく使われるようになり、付いていけない私たち？私は、時々自分が勉強不足のような劣等感(れっとうかん)を感じたりして、そんな言葉を調べられる辞書がないとだめだわと思ったりします。

その仲間の言葉の一つ、「終活」。やたらあちこちで目にし、聞かれるようになりました。一昔前は「しゅうかつ」と言えば「就職活動」の短縮版でした。未来を開いて行くための活動ですよね。

「終活」どう受け取られているのでしょうか。今どきの便利帳、インターネットで出してみると、

終活とは、「人生の終わりのための活動」の略であり、人間が人生の最期を迎えるにあたって行うべきことを意味する言葉。主な事柄としては生前のうち

に自身のための葬儀(そうぎ)や墓などの準備や、残された者が自身の財産の相続を円滑に進められるための計画を立てておくことが挙げられる。これは週刊誌『週間朝日』から生み出された言葉とされており、２００９年（平成２１年）に終活に関する連載が行われた時期以降から「終活本」などと呼ばれるこれに関する書籍が幾つも出版されるなどといった風潮とともに、世間へこの言葉が広まってきており、２０１０年の新語・流行語大賞にもノミネートされ、２０１２年の新語・流行語大賞でトップテンに選出された。それ以降、専門団体、専門誌、もしもカレンダーなど気軽に終活というような取り組みが広がっている。

終活フェスタｉｎ東京２０１４

終活とは人生のエンディングを考えることを通して、〝自分〟を見つめ、〝今〟をよりよく、自分らしく生きる活動のことを言います。

・死ぬことを考えることより、生きることを考える

これから残りの人生をどう生きるか、自分なりの終活とはと、考える良い機会になるのではないでしょうか。

・最期(さいご)を自分で決める時代

自分の死については、自分で考えなければいけない時代がやってきました。

・日本人はなぜ終活が盛んなのか？その社会背景と事情とは？

日本は少子高齢化が進行し、平成２５年の今年は高齢化率が２５．２％、4人に１人が６５歳以上です。また単身者の高齢者が増え続けています。

・人生の棚卸し

終活の第一歩として、まずは終活の目的を深く見つめてみましょう。

なぜ終活をするのか？なぜ、終活をしなくていけないのか?自分なりの終活は、どうするか？

このようなことが、書かれていました。どんなふうに、お考えになりますか？

自分の後始末(あとしまつ)、ということですよね。こうしたら後に残る者が苦労しないかな、こうしておいたら、後で揉(も)めずに済むかな、どんなに案じてみても自

分の身体は残ります。自分が大切にしておいた形あるものは、残ります。何とか講じて後に残る人たちと話し合っておくことが、必要、大切なことと思います。自分が思っていてもなかなか思うようにはならないことが、多いと思います。後は宜しく頼むなと言って往けたなら、しあわせ、有り難いことですよね。

これからどれだけのいのちが有るのかということは、誰にも判(わか)らず、歳や立場に関係なく平等です。ということは、誰もがみな終活を考えるとしたら、一緒ですよ。つまり今をいかに生きるか、どうしたら次に繋(つな)げられるか、自分の思いを伝えられるかということが大切なことではないでしょうか。私たちは、いかにしても独りでは生きてゆけないのです。食べ物だけでも沢山のいのちをいただいて生かさせていただいています。いただいたいのちどうやってお返しして、大切に生かさせていただいていくのか見つめ、考えてみることが、「終活」ならず私の「修活」私のいのちをいかに「修(おさ)め活かしていくのか」ではないでしょうか。そしてその有り様をしっかり見通し、見ていてくださると、阿彌陀さまがおっしゃてくださっておられます。そのおこころに背くことないように生きたいものです。

「御堂さん」という、大阪教区教務所本願寺津村別院で発行している冊子の３月号に、素敵な句が載っていました。このところ落ち込んでいる心にじぃーんと響いてきました。

余生とはラストダンスの砂時計

［評］余生とは？と問うて、「ラストダンスの砂時計」という中七下五を続けたところにこの句の魅力を感じた。踊る二人の軽いステップ、逆さにした砂時計は静かに時を刻んでゆく。作者は七十歳。時間はまだある。ラストダンスははじまったばかりだ。語り合いながら余生という時間を、存分に楽しんでみるといい。

住職曰く、余りじゃないよ。往生浄土の大道だよ。胸張って行こう。

あけし　あれこれ

イカリソウ（碇草）

鉢植えのまま、もう５年以上経ってしまったけれど、春が近づくと小さな芽を出してかわいい葉が伸びてきます。いつも楽しみにもうそろそろかなと待っています。細い茎にハート形の小さな葉が背を合わせたように顔をそろえていっぱいになります。その中からピンク色のかわいいランのような花形のお菓子のような花が顔を出して咲きます。そよ風に小さく揺れている姿は、小さな髪飾りのようです。

イカリソウ（碇草、錨草）メギ科イカリソウ属の落葉多年草

分布は北海道と本州。おもに北海道の渡島半島から、本州の太平洋側にかけて多く、山地の林内などに見られる。茎は３つに枝分かれして長いハート形の葉をつける。４月ごろ、林のふちや渓谷、ほの暗い樹陰などに咲く。花の形も三出複葉も独得の形で、一度覚えると忘れることのない野草だ。花の形が船の錨に似ているからで、５～６個の花が風に揺れるさまは、まことに繊細優美。根を煎じると強壮、強精の薬効があるのは古くから知られている。新芽を山菜として食す。